

一

次の I・II の問いに答えなさい。

I ①～③ のカタカナを漢字に直しなさい。また、④～⑥ の漢字の読みを答えなさい。

- ① 実力をハツキする。
- ② 大雨ケイホウが発令される。
- ③ 火に油をソソぐような発言だ。
- ④ 薄情にも友を見捨てる。
- ⑤ 社会を風刺した漫画だ。
- ⑥ 計画を推し進める。

II 次の (①)、(②) に適当な漢字一字を入れて、上の言葉と反対の意味になるようにしなさい。また、(③)、(④) に適当な漢字一字を入れて、上の言葉と似た意味になるようにしなさい。

- 拡大 ↑ (①) 小
- 地味 ↑ (②) 手
- 手柄 | 功 (③)
- 互角 | 対 (④)

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

海岸線に沿った国道をちよつと脇道に入った角に、喜一の勤めるガソリンスタンドはある。高校を卒業したあと、二年間自動車整備の学校へ通って、友人の口利きでここに勤めはじめた。

アルバイトはたくさんいるけれど、社員として働いているのはごくわずかだ。マネージャの次に古顔の浩司は高校を中退してこのスタンドに勤めはじめたと聞くが、喜一とは同年ということもあって仲が良い。入れ替わりの激しいアルバイトの中で長く続いているのは悦子という女の子だ。マネージャの親類の娘だという話だが、小さな身体でこまごまとよく働く。

顔は十人並み以上と言える悦子だが、いつも冷たい水にさらしているため手はガサガサに荒れてしまっている。しもやけだらけの悦子の指を、浩司がよく「象の鼻」と言ってからかう。悦子は気にも留めないふうを装っているが、喜一は、悦子がしばしば洗面所に入るのは手にクリームをすりこんでいるためだと知っている。喜一はそんな悦子が好きだった。

喜一のスタンドにその車がやって来たのは、暦の上ではようやく春になり、そろそろ仕事やりやすくなりはじめたころだった。その日早番だった喜一は、夕方すぎに青い作業服を脱いでジーンズに着替え、熱い缶コーヒーで冷えた指先を温めていた。

事務所のレジの内側に坐って外を眺めていると、ガラスのむこうで揃いの青い作業服姿の浩司とマネージャが、肩をつつき合っているのが見えた。マネージャは浩司を息子のように可愛いがっている。浩司は人なつこく客扱いも上手いのだが、高級車に乗ってくるアベックにはひどくぞんざいに接する癖があった。灰皿の交換さえしないことがある。マネージャはそんなときの浩司を、見て見ぬフリをしているふしがあった。

隣の洗車機から水びたしの車が出て来た。悦子に呼ばれた浩司がその車の方に駆けて行く。洗車を終えた車をふたりがかりで拭いているのを見ながら、喜一は、ああしていくうちに悦子の指のしもやけはまたもや悪化するのだらうな、などとぼんやり考えていた。車を拭くふたりの後ろ姿を、矢のような光が射し照らしたのはそのときだった。赤いアウディがスタンドに入って来ていた。左側のヘッドライトが壊れてしまっているらしく、矢のように見えたのは不自然な形で前方を照らしている右側のライトだった。

「いらっしやいませえッ」

声だけは威勢のいい新人りのアルバイトが赤いアウデイに駆け寄って行く。スタンド内の黄色い灯りに照らされて、助手席に坐っている若い女の横顔が見えた。

④ 浩司じゃなくてよかつたナ。

喜一は心の中で、赤い車の運転席から身を乗り出し出している若い男に話しかけた。

「あれ……」

ガラス窓のこちら、レジの内側に坐って、見るともなしに赤いアウデイを眺めていた喜一は思わずそう呟いた。運転席の男の話にしばらく頷いたり首を傾げたりしていたアルバイトが、困った顔になって喜一の方を見たからだった。

——どうしたんだろう。

そう思った喜一が **X** を浮かせたのと同時に、アルバイトは洗車機の方に向かって大声を出した。

「浩司さん」

呼ばれた浩司はバツと外車に一瞥をくると、雑巾を片手に持ったままゆつくりと赤い車に近づいて行った。

立ったままでアルバイトの話聞いていた浩司は、やがて手にした雑巾を投げつけるようにアルバイトに渡すと、あからさまに嫌な顔をして赤いアウデイの前方に廻り込んだ。

喜一は立ちあがって事務所のガラス扉を開け、大声を出した。

「なんかあったア？」

浩司は喜一のほうをちらりと見ただけで、また **A** 顔で腕を組んだ。喜一は外に出て赤い車の傍に駆け寄り、もう一度浩司に訊いた。

「どうしたよ」

浩司は面倒そうに、ケツと声にならぬような声を出してから答えた。

「ライト壊れちゃってんだって」

「うん、さつき見たけど……」

「直してほしいって言うんだけどさ」

「切れちゃってんだろ？ 部品がないと直せないじゃん」

「俺もそう言って断ろうとしたんだけどさ……。部品は持つてるって言うんだよ」

「へえ……」

「これから混むしさ。時間かかるし、人手もないし……。参ったなア」

浩司はそう言って舌打ちすると、さらに小さな声で喜一の耳もとに囁いた。

「適当に言っただけらうか。」

喜一はそつと赤い車を盗み見た。助手席で不安げな顔をしていた女と、喜一の視線がフツと触れた。それが合図のように女は車から降りてきて、良からぬ囁き合いをしている喜一と浩司の方を遠慮がちに見つめた。カシミアのセーターの肩が小刻みに震えている。

⑤ 「いいよ、俺やってやるよ」

ほとんど無意識のうちに、女を見ていた喜一の口からそんなことばが飛び出していた。

「ええ!? いいよオ、面倒臭いじゃん。第一、喜一はもうあがってんだろ」

「うん、でもいいよ、やるよ」

喜一はそう答えて運転席の側に廻った。別の車の給油を終えたマネージャーが、「なんかあったのかア」と言いながらこちらに近づいて来た。

「何でもないっす」

浩司は大声でそれに答えた。給油のための車が続けて二台入って来て、浩司はもうアウデイにかかずにあつてはいらなくなつた。

「金は取れよ」

駆け出し際に、浩司が喜一の耳もとで低く言った。

運転席の男も車から降りて、革のジャケットの裾をピンと伸ばすようにした。

喜一は工具箱を持って来ると、男から部品を受け取って赤い車の前方にしゃがみこんだ。

ライトのつけ替えは時間と手間がかかる。しゃがみこんで作業に集中する喜一の後ろで、男は革ジャケットのポケットに手を突っ込んだまま喜一の様子をただ眺めていた。女の方は喜一の横、少し離れた位置で中腰になって、喜一の手もとを見つめている。いい匂いがすると思ったのは、女の香水らしかった。

そのとき喜一は突然、油の染みついた自分の黒い指をひどく憎らしく思った。依然として男は喜一の背後でポケットに手を突っこんで構え、女は喜一の汚れた指が動くのをじっと見つめている。手を動かしながら、喜一は自分の身体の中で何かを熱を持ち、熱く膨れあがってくるのを感じた。喉もとまでせまったそんな思いに負けまいとするように、喜一は女の顔を覗むように見返した。

女は少しとまどい、**B** 顔で微笑んだ。微笑んだ顔は綺麗だった。中腰になった膝のところまで身体を支えている女の指はしなやかに長い。赤いマニキュアが濡れたように光った。喜一の身体の内側がますます熱く膨れあがった。

立て続けに入ってきた幾台かの車の給油を終えて、浩司と悦子が赤いアウディに近づいてきたとき、ライトのつけ替えは完了した。

「終わったのオ？」

立ち上がった喜一を見て悦子が声をかけた。喜一は振りむいて悦子を見た。青い作業服を着た悦子が、急にひどく野暮ったく見えた。

女も **X** を伸ばし、車の中からバッグを取り出して喜一に言った。

「じゃあ、お支払いの方を」

はじめて聞く女の声は高く透きとおっていた。喜一の中で激しく膨らんでいた思いが、そのときブスンと音を立てた。

「いいんです」

身体が急速に冷えはじめるのを感じながら喜一は言った。

「えっ？」

「いいんです、僕がやりたくてやったんだから」

「え、でも……」

「いいんです。早く行ってください、他の車のジヤマになるから」

喜一はほとんど追いたてるようにして、ふたりを赤いアウディに乗りこませた。

ライトの直った車は、前方のアスファルトを明るく照らし出した。遠ざかる赤い車のテイルランプを突っ立ったまま見つめる喜一の肩を、ポンと叩いた悦子の指は、やはりしもやけで腫れていた。

「いらっしやませえッ」

マネージャーと新入りのアルバイトが同時に叫んで、浩司と悦子は向こうを振り返った。慌てて駆け出した悦子を追うように二、三步向こうへ進んだ浩司が、くるりと振りむいて喜一の傍に戻った。

「バカ」

さっきのように耳もとで低く呟いた浩司は、「いらっしやませえッ」と叫びながら新しく入ってきた車の方へ駆けて行った。

身体の内側に熱の余韻を感じながら、喜一は足もとのコンクリートに目を落とした。あたりはすっかり暗くなって、濡れたコンクリートが黄色い灯りに光っていた。

(鷲沢萌「指」より)

〈注〉※1 アベック……男女の二人連れ。

※2 アウディ……ドイツの自動車メーカー。ここでは高級車として描かれている。

※3 一瞥……ちょっと見ること。

問一 傍線部①「暦の上ではようやく春になり」とありますが、この日のことを何と言いますか。漢字二字で書きなさい。

問二 傍線部②「マネージャーはそんなときの浩司を、見て見ぬフリをしているふしがあった」とありますが、なぜマネージャーは見
て見ぬフリをするのですか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 浩司の接客態度には問題があるが、浩司が可愛くてしかたがなく、何をされても許せるから。
- イ 浩司の接客態度には問題があるが、その他では問題なく働けており、見逃すのが当然だから。
- ウ 息子のように浩司を可愛がっている分、客によって態度を変える浩司を大目に見ているから。
- エ 息子のように浩司を可愛がっている分、怒った時に浩司が感情的にならないかと不安だから。

問三 傍線部③「悦子の指のしもやけはまたもや悪化するのだろうな」とありますが、悦子の手はなぜしもやけになっているのですか。
その理由を本文中から十六字で書き抜きなさい。

問四 傍線部④「浩司じゃなくてよかったナ」と喜一が思ったのはなぜですか。「浩司は」に続いて、本文の言葉を使って三十五字
以内で書きなさい。

問五 本文中に二箇所ある **X** には、身体の一部を表すことばが共通して入ります。その言葉を漢字一字で書きなさい。

問六 空欄 **A**・**B** にあてはまる言葉として次の中から適当なものを一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。(ただし、
各記号は一回しか答えられません。)

- ア むくれたような イ 悩んだような
- ウ 考えこむような エ 困ったような

問七 傍線部⑤「いいよ、俺やってやるよ」とありますが、この時の喜一の心情として適切でないものを、次の中から一つ選び、記号
で答えなさい。

- ア 車のライトのつけ替えくらいなら自分にもできる。
- イ 車のライトが壊れて困っている女性を助けてあげたい。
- ウ 就業時間を過ぎているが店が落ち着くまで手伝おう。
- エ アベックを追い払うことができなかったのでしょうか。

問八 傍線部⑥「油の染みついた自分の黒い指をひどく憎らしく思った」について、以下の問いに答えなさい。

1. 喜一はなぜこのように思ったのですか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。
 - ア 指を汚して真面目に働く自分と、高級車に乗るアベックとの置かれている境遇の差を意識したから。
 - イ 指を汚して真面目に働く自分と、裕福なアベックとを比べて富こそが全てであると気づいたから。
 - ウ 普段は関わらないような綺麗な女性に接して、このような女性ともっと仲良くなりたいと思ったから。
 - エ 普段は関わらないような綺麗な女性に接して、自分との違いを嘆いて仕事をやめたいと思ったから。

2. 喜一は同じような気持ちを悦子に対しても抱いています。それがわかる一文を探し、はじめの五字を書き抜きなさい。

問九 傍線部⑦「バカ」と喜一に言った浩司は、どのような気持ちでこの言葉を発したと考えられますか。次の中から適当なものをつ選び、記号で答えなさい。

- ア お金を取らなかつた喜一に対して、店のことを思つて本気で怒っている。
- イ お金を取らなかつた喜一に対して、しかたがなかつたと慰めている。
- ウ 自分が心配していた通りの展開となり、喜一に心からうんざりしている。
- エ 自分が心配していた通りの展開となり、喜一にあきれながらも慰めている。

問十 本文の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 喜一は、自分とはかけ離れた生活をしている人たちへの憧れを、完全に消し去ることができた。
- イ 喜一は、自分とはかけ離れた生活をしている人たちに触れ、自分も裕福になると意気込んでいる。
- ウ 喜一は、自分とはかけ離れた生活をしている人たちに触れたことで、今の自分を見つめ直した。
- エ 喜一は、自分とはかけ離れた生活をしている人たちへの憎しみを、少しずつのらせていった。

三

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

日本の神話にも、ユーモラスなものがある。

ある時、ふたりの神さまが我慢くらべをしたという。ひとりの神さまは重い土を持ち運び、もうひとりの神さまは大便をじつところえることとして、どちらが長続きするか、競争したそうなる。

結果は、①とうと、ふたりは同時に土を投げ出したり、大便をしまつて引き分けとなつたとか。

しかし結果はともかく、こうして我慢できたらえらい、という価値観がもう八世紀のころに語られているとは、考えさせられるではないか。何事によらず、とかく大らかだつたと思われる古代だのに。

★ところで、なぜこんなびろうな話から始めるのかというと、とかく現代では「我慢」が流行らないと思われからだ。

ついでこの間の戦争時代には「欲しがりません。勝つまでは」という標語の下に、子どもたちはすべてに我慢を強いられた。

古くも「臥薪嘗胆」といふと、苦しみに堪えて目的を達成することだつた。心身の苦難を堪えしのぶことが要求され、その結果、み

ごとな成功をおさめた。

③ 古来の日本人は我慢することを美德と心得た。それは何も、不自然に気張つたからではない。

神話はユーモラスな我慢くらべだつたが、もつとまじめに言えば、我慢とは抑止することで、抑止の中で蓄えられる力を大切にしながら、我慢は美德だったのである。

能楽が極力演技を節約することにも、抑止の力の大切さが表れている。

堪えしのぶことが美德だつたからこそ「しのぶさん」という人名も生まれた。

ところが最近、きつとたくさんの「しのぶさん」が嘆いているにちがいない。「近ごろの人は何でもしたいことをするし、言いたいことを言う。じつと堪えることなど忘れてしまった」と。

なぜか。思ったことはどんどん言うのが近代式と、奨励したからである。

国会の野次に我慢できなくなつた議員がコップの水をかけた。ちよつとでも注意されると若者はすぐキレる。この間も新幹線で若者が、

いきなり車掌に怒鳴りはじめた。私も何事かと思わず顔を向けようとしたが「待てよ、ガンツケしたと因縁つけられるとヤバイ」とじつとしていた。

しかし降りる時に見ると（A）若者だった。車掌がくどく何を言ったかは知らぬが、かくしてキレルのは、きわめて当たり前の風景なのだ。

あげくの果てには、キレて相手を殺す事件までおこった。

ところで一方、皆さん自身がキレそうになったことは、ないだろうか。私自身は胸に手を当てるまでもなく、大いにある。キレルのを若者とばかり決めつけるわけにはいかない。

もう我慢の限界！ ということがあちこちにちらばっていきすぎる。

たとえば電車。「降り遅れ」という新語ができたほど、降りる客がのんびりしている。降りるのか降りないのか、はっきりしないが降りたらしい。

一方、周りの客も降りる客がいるならドアが閉まらないうちに、さっさと身を引いて降りてやればいいのに、こちらにも切迫感はない。

私など、こんな集団に巻き込まれていると「一所懸命降りてくれ！」と大声をあげたくなる。しかし一所懸命一人でドアに向かって突進しようものなら、大衆は「なに？ これって」とエイリアン扱いだろう。

野次もアホらしい野次が延々とつづくこともあるだろう。いじめも陰湿にいつまでもつづいて、ついには堪忍袋の緒も切れることがあるかもしれない。

すべて現代人の行動はしまりがなくて（B）もなく、牛の涎のようにグラグラとつづいていて切りがない。

それでいて情性に流されていないと目立ってしまったって、かえっていじわるをされるのが今の社会だという。

そうなる、一概にキレル、キレルと非難するのもおかしいことになる。成人式で若者が騒ぐのも、講演が（C）からだ。

どうもキレルことは双方の関係から起こる。いま流行の「双方向的な」事柄を、一方的に責めるわけにはいかない。

牛の涎の世相とくらえ性のない人間と、この二つが巡りまわっている現代を何とかしなければ、幸せな生活はできない。

（中西進『日本人の忘れもの3』より）

〈注〉※1 びろう……けがらわしいこと。きたならしいこと。

※2 臥薪嘗胆……かたきを討つ志を保つために、ひどい苦勞を自分に課すること。

※3 エイリアン……SFなどで、地球以外の天体に住む宇宙人。

問一 傍線部①「結果は」の後に省略されている言葉を自分で考えて、七字以内で書きなさい。

問二 傍線部②「とかく現代では『我慢』が流行らないと思われる」とありますが、どうして現代は「我慢」が流行らないのですか。その理由を説明している一文を探し、はじめの五字を書き抜きなさい。

問三 傍線部③「古来の日本人は我慢することを美德と心得た」とありますが、どうしてそう考えたのですか。本文中からその理由に当たる箇所を三十字から三十五字以内で抜き出し、そのはじめと終わりの五字を書き抜きなさい。（句読点を含みます）

問四 （A）にあてはまる言葉として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 短気そう
- イ 身体の小さい
- ウ ごくふつうの
- エ 元気の良さそう

問五 (B) にあてはまる言葉として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 意図 イ 遠慮 ウ 規則 エ 節度

問六 傍線部④「惰性に流されていないと目立ってしまつて」とありますが、惰性に流されないで目立ってしまう行動とはどういうものですか。本文の内容に沿って、三十字以内で答えなさい。ただし書き出しは、「電車の中で」に続く形で始めること。

問七 (C) に、適当な語句を自分で考えて四〜七字で書きなさい。

問八 本文は大きく三つの段落に分かれます。第二段落の最初は、本文七行目★の所ですが、第三段落の最初はどこですか。はじめの四字を書き抜きなさい。

問九 筆者は冒頭部で「神さまの我慢くらべ」の話から始めましたが、そのねらいは何ですか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大らかなはずの古代の八世紀に、なぜ我慢することの美德が神話で語られているのかと読者に問いたかった。

イ 八世紀にすでに我慢することが美德と考えられていた日本の国民は、非常にまじめであると読者に伝えたかった。

ウ 八世紀とは異なり、現代では心身の苦難を耐え忍ぶことをあまりしないのはなぜかと読者に問いたかった。

エ 心身の苦難に耐えるのは、八世紀より現代の人々の方が真剣に考えていると読者に伝えたかった。

問十 本文の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一般の人でさえキレることが珍しくなくなったが、それはキレル方よりキレル原因を作る方にこそ問題がある。

イ 現代人が「我慢」を忘れてしまうのは確かによくないが、戦争時代のように「我慢」を強いるのも考えものである。

ウ 惰性に流されないで自分の意見をしっかりと持ち、周囲からどう思われようが、正しいと思つたことをするべきだ。

エ キレル側のみを問題とするのではなく、キレル原因を作る側にも視点を向けて社会を改善していく必要がある。

